

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### A. コースワークの充実・強化

#### ①人材養成目的に沿った科目構成の整理

##### 《人社系》

#### ●上智大学グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻

##### 「現地拠点活用による協働型地域研究者養成」の事例

###### (具体的に何を実施したのか)

文献調査が主となる博士前期課程の学習においても、文献の中で出会う状況を、より現実感をもって受け止められるよう、博士前期課程における学生の現地調査を奨励し、1年次の「フィールドワーク（基礎調査）」、2年次の「フィールドワーク（専門調査）」の2科目として制度化した。これら2科目は必修科目の「地域研究方法論」「地域調査方法論」の内容と連動し、必修に準ずる位置づけを与えた。これにより、本専攻が推進しようとする地域研究のあり方を、学生に対しても、また学外に対しても端的に示す中核科目群を構成した。

###### (実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

本専攻が研究対象地域とする東南アジア、南アジア、中東、ラテンアメリカから地域バランスを考慮して3名の教員を担当に充て、現地調査開始以前の計画段階および終了後の報告段階で、担当教員と履修学生全員によって、各自の調査に徹底的に検討を加えた。その一方では、調査自体は画一化せずに、学生の様々な試みを広く許容して、学生が地域と分野について自由な選択をしつつ、他地域他分野を専門とする学生の試みにも積極的に目を向け、専攻の推進する地域研究の大枠を常に意識できるようにした。計画段階、報告段階の双方において、口頭発表と文書の提出を、フィードバックを行いつつ繰り返して、研究者としての発表技法の高度化にも留意した。

###### (どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

本専攻博士前期課程の学生は以前から現地調査への指向が強いが、フィールドワークが科目として制度化されたことにより、現地調査の実施を博士後期課程進学まで待つことなく、短期に、場合によっては中長期にわたり実施する学生が明らかに増加した。その経験は直接間接に学生の修士論文等に反映して内容の高度化に結びついており、また博士後期課程進学予定の学生は、早い段階で調査の足がかりを築くことが可能になった。加えて調査計画、調査報告が文書として蓄積され、これは必修科目の地域調査方法論の科目内容等に活かされつつあり、今後は地域研究を志す学部 of 学生向けにも活用していく予定である。

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### E. 学習・研究環境の改善

#### ②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

##### 《人社系》

#### ●上智大学グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻

#### 「現地拠点活用による協働型地域研究者養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

プログラム実施期間中の各学期に、現地調査支援を公募し、競争的選抜を経て、博士前期課程および博士後期課程の複数名の学生に調査実施に必要な交通費の一部を支援した。支援対象は平成20年度に10名、平成21年度春学期6名、秋学期7名、平成22年度春学期9名、秋学期7名に上った。公募にあたり学生は自らの調査計画を指導教員と相談しつつ立案し、採用決定後には必要な手続き書類を作成し、調査実施後には調査報告を執筆した。調査報告はウェブサイト上に掲載された後、冊子体で刊行され、後者は学内外の研究者に配布してフィードバックを請う一方、博士前期課程1年次必修の地域調査方法論の教材や本専攻入学を希望する学部学生向けの資料として利用した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

現地調査の立案、実施、成果とりまとめのいずれの段階においても、指導教員と密な連絡を保つよう、各段階で指導教員のフィードバック完了を確認する手続きを定める一方、指導教員に限らず、現地滞在中の教員や現地の研究者などに随時の指導を専攻として依頼し、学生の独自性を尊重しつつ、細やかに調査の進展状況を見守ることを心がけた。制度化されたフィールドワーク科目との連動を可能な限り行い、またカンボジアおよびエジプトに設けた海外拠点からの情報提供、研究者紹介などの支援も積極的に実施した。将来的に外部から長期調査支援の資金を獲得する練習を兼ねていることも学生に周知徹底した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

博士前期課程の学生については、フィールドワーク科目の制度化と併せて、修士論文に現地調査の内容が直接間接に反映される例がふえ、以前にもまして充実した内容の論文が増加した。博士後期課程の学生についても、調査支援が長期調査前後の予備調査、補足調査の実施にとって有効であった。この支援をきっかけに、博士前期課程から半年以上の現地調査を行う学生が複数現れたのもこれまでにないことであり、さらに学外からの長短期の留学および調査の助成獲得に成功した学生の数もふえた。成果の刊行は、学生にとって小さいながらも業績の蓄積に結びついて研究意欲を高め、受験希望者や新入の大学院学生からも将来の参考

になるとの声が寄せられた。

## 1. 特に効果的であり改善に資した事例について

### E. 学習・研究環境の改善

#### ⑤その他

##### 《人社系》

#### ●上智大学グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻

##### 「現地拠点活用による協働型地域研究者養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

上智大学がカンボジア王国シェムリアップ市に有するアジア人材養成研究センターを、本プログラムの海外拠点と位置づけ、学生の訓練機会や調査への情報および利便を提供した。現地常駐職員の他、講義期間が終わって学生の現地調査が集中する期間には、本プログラム採用のプロジェクトPDが常駐して、様々な研究プロジェクトと連動しつつ学生の研究調査を支援した。エジプト・アラブ共和国カイロ市には、日本学術振興会カイロ研究連絡センターの一角を借り受けて、上智大学カイロ研究センターを開設し、こちらにはプロジェクトPDが常駐して、同様の支援にあたる他、現地および周辺各国の教育研究機関との協力体制構築、本専攻への入学希望者への対応などに従事した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

海外に恒久的な拠点を築き維持することには、それぞれの国の事情なども絡み様々な困難があり、本プログラムの実施期間中に限ることなく長期的な視点をもって、拠点の維持拡大に努めるよう留意した。カイロ研究センターの常駐プロジェクトPDについては、本学の教員としては、海外を常駐の勤務地とする初の例であったことから、海外危機管理会社と契約をなすなど、今後の取組に有効な制度的枠組みの整備にも気を配った。また、拠点を有効に活用する観点からも、専攻単体ではなく、本学の研究所や大規模研究プロジェクトの活動との連携に力を入れ、その連携が学生それぞれの調査研究の推進に活かされる方法を模索した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

海外拠点の存在は、拠点がある地域で調査研究を実施する学生にとっては多くの点で直接的利益をもたらした。カイロでは2010年以降政治的に不安定な状況が続き、年末には一時的にPDを国外退避させなくてはならない事態に陥ったが、調査中の学生の安全確保にも拠点は有効であり、2011年3月以降速やかに学生への支援を再開できたのも、拠点があればこそであった。費用的な問題から大規模な学生の調査訓練などは、他の研究プロジェクトとの連携が必要だったが、これも拠点があることによって円滑な連携を実施できたといえる。加えて、周辺諸国の研究教育機関と専攻との教育と研究の両面にわたる連携も、海外拠点を介在させ

ることでいっそう円滑に運ぶことができた。